

令和4年度農作物病虫害発生予察注意報第6号

令和5年(2023年)3月30日
山口県病虫害防除所
山口県農林総合技術センター

病虫害名 イチゴのアザミウマ類

1 発生地域 県内全域

2 発生程度 多

3 注意報発令の根拠

- (1) 3月22日～24日の巡回調査では、アザミウマ類（主要種はヒラズハナアザミウマ）の発生は場率85.0%(平成30.7%)で、過去10年間で最も多かった(図1、写真1)。また、寄生花率は2月下旬から急増し、14.4%(平成3.1%)で平年に比べ多かった(図2)。
- (2) 福岡管区気象台の1か月予報では、4月の気温は高く、降水量はほぼ平年並みとされており、アザミウマ類の活動に好適な気候が続くと考えられることから、イチゴ果実への被害が懸念される(写真2)。

4 防除方法

- (1) ルーペ等を用いるなどして本虫の発生状況をよく観察する。花に息を吹きかけると本虫が動き、確認しやすくなる。
- (2) 発生を認めた場合には、直ちに薬剤を散布する。
- (3) 防除薬剤は別表を参照する。

5 防除上注意すべき事項

- (1) 多発生（寄生花率10%以上）の場合には、異なる薬剤を用いて複数回防除を行う。薬剤散布後には必ず防除効果を確認する。
- (2) 薬剤抵抗性を発達させないために殺虫剤コードを考慮し、同一系統薬剤の連用は避ける。
- (3) 薬剤散布を行う場合は、ミツバチへの安全日数を考慮する。
- (4) 天敵を放飼している場合には、天敵に影響の少ない剤を選択する。ただし、アザミウマ類成虫の発生が多い場合には、本虫の防除を優先する。
- (5) 防除にあたっては、適正な薬剤散布作業の実施、農薬使用基準の遵守など安全で効果的な防除に努める。

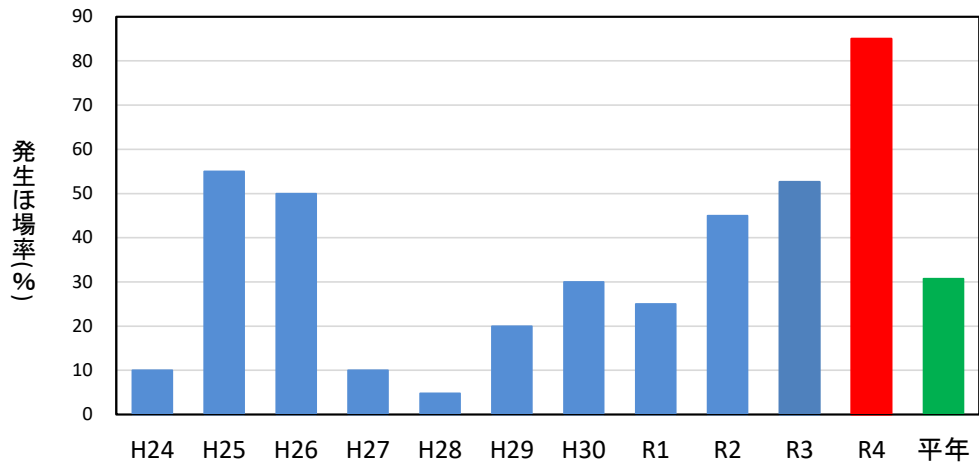


図1 発生ほ場率の年次推移 (3月下旬)

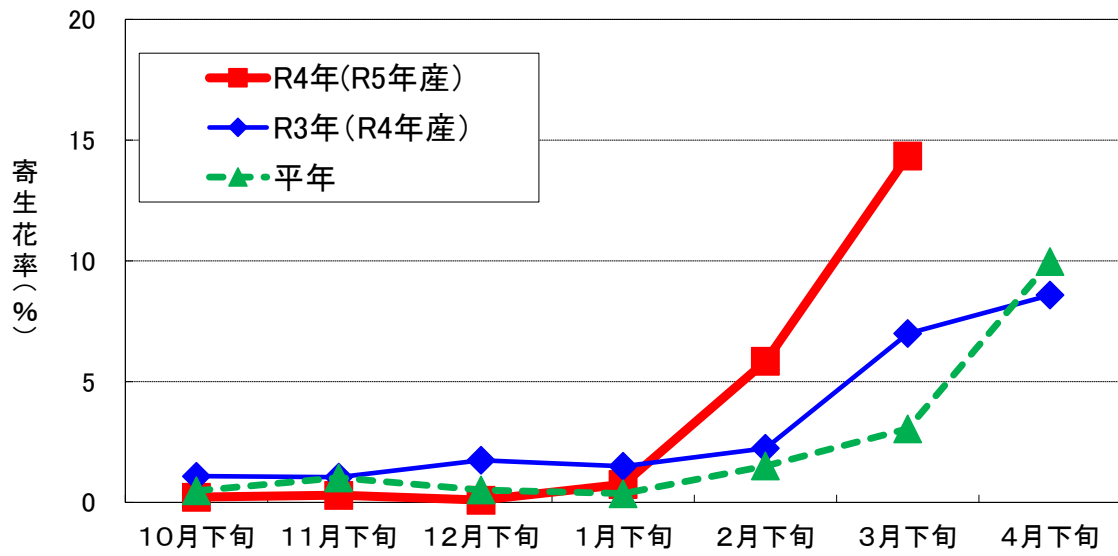


図2 アザミウマ類の寄生花率の推移



写真1 イチゴの花に寄生するアザミウマ類成虫



写真2 アザミウマ類の被害を受けた果実

表 イチゴのアザミウマ類に登録のある主要な薬剤

殺虫剤 コード	商品名	希釈倍数・使用量 散布液量	使用時期 (収穫前日数)	使用回数	使用方法	ミツバチ への 安全日数 ^{注2)}	カブリダニ への 安全日数 ^{注2)}	備考
3A	アーデント水和剤(普) ^{注1)}	1000倍,150～300リットル /10a	収穫前日まで	4回以内	散布	2～3日	21～60日	速効性
4A	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	2000倍,100～300リットル /10a	収穫前日まで	2回以内	散布	翌日	7～14日	速効性 抵抗性発達の事例あり
	モスピランジェット(劇)	400立方メートル当たり50g	収穫前日まで	2回以内	くん煙	翌日	7～14日	速効性 抵抗性発達の事例あり
5	スピノエース顆粒水和剤 (普)	5000倍,100～300リットル /10a	収穫前日まで	2回以内	散布	3～7日	7～14日	速効性
	ディアナSC(普)	2500～5000倍,100～300リッ トル/10a	収穫前日まで	2回以内	散布	3～7日	14日	速効性
15	カスケード乳剤(普)	4000倍,100～300リットル /10a	収穫前日まで	3回以内	散布	翌日	0日	遅効性
	マッチ乳剤(普)	1000～2000倍,100～300リッ トル/10a	収穫前日まで	4回以内	散布	翌日	0日	遅効性
23	モベントフロアブル(普)	2000倍,100～300リットル /10a	収穫前日まで	3回以内	散布	翌日	30～45日	遅効性
28	ベネビアOD(普)	2000倍,100～300リットル /10a	収穫前日まで	3回以内	散布	翌日	0日	遅効性
30	グレーシア乳剤(普)	2000倍,100～300リットル /10a	収穫前日まで	2回以内	散布	翌日	×	速効性
気門 封鎖	ピタイチ	500倍,100～300リットル/10a	収穫前日まで	—	散布	翌日	—	カブリダニには乾燥後 影響はない

注1) アーデント水和剤はミカンキイロアザミウマでの登録。

注2) 安全日数は農薬メーカーの公開情報等を参考に記入。

注3) 防除効果の確認時期は、速効性の薬剤は概ね散布3～5日後、遅効性の薬剤は概ね散布7～10日後。